

# 安澄の引用せる諸注釈書の研究

伊 藤 隆 寿

## 一はじめに

安澄（七六三—八一四）<sup>(1)</sup>は、現存する我国最古の三論注疏である『中論疏記』七卷<sup>(2)</sup>（本末）の著者である。安澄には、他に『三論名教抄』という書もあつたとされるが、これは現存しない。『中論疏記』は、周知のごとく、嘉祥大師吉藏（五四九—六二三）の『中觀論疏』に対して、詳細な注解と考証を行つたものであり、特に精緻な文献考証にその特色を發揮した書であると評価されている。その文献考証には、安澄の当時、

興の宗派が京都を中心として重んじられ、隆盛に向わんとする氣運にあり、また三論宗と法相宗との抗争も、激しさを増していった。それらの大勢から判断しても、三論宗は、その勢力を弱めていた時期である。<sup>(5)</sup>法相と三論との対立及びそれに對する処置などについては、すでに指摘されている通りである。<sup>(6)</sup>

このような時代にあって、学的立場から、吉藏の『中觀論疏』に対する注疏を撰したことは、画期的と称され得るであろう。

日本において伝承されていた限りでの厖大な資料を駆使していいる。その意味において、極めて貴重なる文献的価値を有すと言えよう。

安澄の時代は、奈良時代末から平安朝初期に位置するが、この時代は、東大寺の造営を契機として、所謂南都六宗が、公式に認められ、成立する。<sup>(4)</sup>また天台や真言という二つの新

三論研究を考える上での資料を提供するに留まらず、中国仏教に関する諸学説・問題を理解する上でも、多くの示唆を与える。さらに、奈良時代の仏教学の状況、対外的な関係との対応等を考える上でも、種々の事柄を、我々に教えてくれるものと察せられる。

そのようなことから、安澄、すなわち『中論疏記』に引用される諸注釈書について、改めて整理をし、分析を加えておくことは決して無益なことではないであろう。安澄の引用書は經・律・論及び中国・日本の撰述書、さらに漢籍であるが、經律論については、吉藏の引用に対する考証を主とするために、特に注目される要素は少ない。ただ、玄奘によつて翻訳された新訳の經論も自由に用いていることが指摘出来る。従つて、安澄の引用書の特色は、中国・日本撰述の諸注釈書に見出されるので、当面の整理の対象としては、それに限定したいと思う。当時の学問という点からは、漢籍の引用状況も見逃がせないが、紙数の関係もあり省略したい。<sup>(7)</sup>

安澄の時代の現存經典・注疏は、『開元錄』所載及びそれ以後翻訳された經典、その他中国・朝鮮・日本の撰述書等であつたとされ、現在藏經との対比も石田茂作博士によつてなされている通りである。<sup>(8)</sup>しかし、石田博士の整理集計は、古

文書に現われた限りのものであつて、いわば、写經所等で公式に書写された記録に基づく。従つて、他にも多くの文献が私蔵されていたことは充分予測される。現在藏經が分量において多大であることは自明であるが、博士も注意しているごとく、奈良朝に現存し、今欠本となつてゐるものが、特に中國撰述書に著しいとされる。この点は、後述の安澄の引用書によつて明らかに知り得るところである。その意味において、中国仏教の研究においては、現在の我々よりは、はるかに研究の資料が豊富に提供されていたことは間違いない。

古くは、百濟・高句麗からの渡来僧によつて朝鮮半島經由で、中国仏教の諸文献が将来され、また、遣唐使の開始と共に、入唐學問僧により、唐から直接将来された。さらに白鳳時代に入つて、新羅との交渉が緊密となり、再び朝鮮半島の仏教が直接的に、そして唐の仏教が間接的に伝えられる。<sup>(9)</sup>後述のごとく、新羅仏教の影響は、安澄においても顯著に見られるところである。安澄の誕生以前、天平年間には、大安寺に、修多羅衆、三論衆、律衆、攝論衆、別三論衆の五衆、法隆寺に、律、三論、唯識、別三論の四衆が設置されていたことや、元興寺にも、三論、攝論、成實の三衆が存していたことは、つとに述べられるところである。これらの各衆について、修多羅衆や別三論衆とは何か、と言つたことについては異説が存し、また修多羅衆でも、大修多羅衆と常修多羅衆は

同じなのか、別なのか。別とすれば、如何なる相違があるのか等、なお検討の余地が認められるが、ともかく、一つの学團として成立していたことは疑い得ない。

そこで、安澄に至る三論宗について一言するならば、古來伝統説として、必ず言及されるのが凝然（一二四〇—一三二二）の三傳説である。<sup>(12)</sup> この説が、そのまま事實として承認して良いものかどうかであるが、これを否定する積極的材料も存しないこと、また事実である。この凝然の記述については、從来、それを傍証する確たる文献もなく、当時の南都で凝然の言う如き三論宗三傳説が行なわれていたものとして理解されている。従つて、凝然に先行する文献、つまり凝然がその記述に際し、考慮したであろう文献等も、何ら指摘されることなく、不明とされている。しかし私見によれば、凝然は何らかの三論宗の伝承に関する文献に基づいて述べたものであろうと考える。法相宗には『法相宗相承血脉次第<sup>(14)</sup>』と言ったものが作成伝承されている事実など三論宗においても、何らかの文献が、存在していたとしても不思議はなかろう。そこで、從来闡説されることのない、『三論祖師伝集』（大日本佛教全書所収）に注意したいと思う。この書は、作者等は不明であるが、全書本の底本には、正嘉二年（一二五八）十二月の東大寺聖守の識語を有する。また内容上、東大寺の東南院に伝承されていたものであることは、その院主次第を付加してい

る点からも明らかである。聖守は凝然と同時代であるが、先輩である。東大寺の真言院に住し、三論と真言を兼學し、當時活躍した人物である。しかるに、この「祖師伝集」には、時代の経過と共に、多少の追加等があつたことは認められるが、その原形は少なくとも聖守以前に形成されていた。つまり凝然以前に成立していたことは間違いなかろう。全書の解題にては、鎌倉初期のもの、もう少し明確に言うならば、東南院主の記述より見て、第十二代の道慶（一一六九）までの記述が本書の原初形態であろうと推定されている。これを凝然が見ていたか否かはともかくとして、筆者の注意したいのは、本書で引用している『三論師資伝』である。これは、日本祖師の伝記を述べる冒頭において、「三論師資伝云」として長文が引用される。<sup>(15)</sup> この文中において、凝然の言う三傳説の原形と思われるもの、むしろ、そのままの記述が見られるのである。但し、凝然のごとく、明確に第一伝、第二伝等という述べ方はしない。また慧灌—福亮—智藏—道慈という縦の繋がりも明確には述べない。しかしながら、日本三論宗が慧灌に始まること、次に智藏、その次に道慈という入唐生が続き、いわゆる三論の三流を示している点は注目されて良い。それを承けて「祖師伝集」では、第一慧灌、第二智藏、第三道慈として伝を述べる。この「師資伝」が何人の作であるのかは、今のところ不明である。しかし、智藏の系統を述べ、

智藏—智光—靈叡と次第し、靈叡の門下に東大寺の漸安、玄覺、元興寺の薬宝があり、その玄覺は入唐生であるといい、「今吾三代之祖師也」という。<sup>(16)</sup>つまり玄覺の系列に連なる人物の作にかかるものであることが明らかである。玄覺は安澄とほぼ同時代の人と考えられるから、「師資伝」は、平安の中期には成立していたのではなかろうか。しかも、本書に述べられる日本三論宗の初期から安澄の時代までの系譜は、以後の三論関係の文献に踏襲されていることが窺われる。

「祖師伝集」等、現存する三論系譜に関する資料及び右の「師資伝」については、さらに吟味しなければならないが、凝然は、何らかの具体的な文献に基づいて、先の伝統説を評価位置づけたであろうことを指摘しておきたい。<sup>(17)</sup>

三論学の日本伝来については、聖德太子の師とされる慧慈（一六二三）や慧聰（一五九五）は、成実の学者であると同時に、三論の学者であつたともされるが、もし、そうであつたとしても、時代的には、吉藏の三論学は承けていないと考えられるし、また、太子の三經義疏が、彼らの指導に負うとすれば、この中にも、三論学の影響は認められない。従つて、彼らは、恐らく成実を主とせる人々であつたと見るのが妥当であろう。但し『維摩義疏』については、僧肇の『註維摩』を依拠としている点で、三論の系統に連なるものとも考え得る。<sup>(18)</sup>従つて、我国への三論宗の伝来は、やはり凝然のいう第

一伝たる慧灌（一六一五一）によるということになろう。年代的には、伝のごとく、入唐して、吉藏から受学した可能性は認められる。彼は、孝徳天皇の代に元興寺の僧として、天皇に三論を講じたという。この時の聴衆として惠隣（輪）、恵妙、僧旻、道登、常安、惠雲、惠至（資・師）、靈雲、福亮があり、講が竟る日に、その勧賞に与り、僧正に任せられた。<sup>(20)</sup>この因縁により、三論宗の伝統では、これら九僧正をすべて慧灌の弟子に数える。<sup>(21)</sup>右の九人のうち、慧灌から三論を相承した者として一致して上げられるのが元興寺の福亮（一六五八）である。福亮に受学した者としては、元興寺の神泰と法隆寺の智藏（一六七三）があり、智藏も入唐し、法隆寺において三論を広め、第二伝とされる。智藏の入唐による師承は不明である。伝記類では、やはり吉藏に受学とするが、これは年代的に不可能である。前田慧雲博士は、『三論宗綱要』（七二頁）において、均正（惠均）或は磧法師と何等関係あるか、とされるが、なお再考の必要があろう。この智藏の次が、第三伝とされる道慈（一七四四）であり、善議（七二九一八一二）—安澄と続く。神泰の系統は元興寺に相続されて存し、宣融—玄耀等と続く。右のうち、道慈は、三論宗としてのみでなく、日本仏教史上、種々の点で重要な位置を占める人物であることは、従来述べられるところである。伝統説では、道慈と共に智藏の弟子として、元興寺の智光（七〇八一）と礼光が数え

られるが、否定的見解も早くから存する。<sup>(22)</sup> 安澄は、道慈の正系を継承するものである点は間違いなかろう。安澄の同門に勤操（七五四一八二一七）があり、安澄の滅後、平安仏教界で重きをなす。<sup>(23)</sup>

以上のごとく、安澄の時代には、元興寺、大安寺、法隆寺において三論の研究が行なわれ、一つの学団を形成し、各々の伝統を有していたことが知られ、他にも、多くの三論学者を数えることが出来る。<sup>(24)</sup> また安澄以前において、前述のごとく三論衆と別三論衆が存在していたことである。<sup>(25)</sup> 安澄の頃は、この両者が一つにまとめられて、三論宗と呼ばれるようになつてゐるが、<sup>(26)</sup> この別三論衆を田村博士の言われるごとく元康の教系とすれば、道慈は入唐して元康に学んだ、というのが三論宗の伝統説であり、<sup>(27)</sup> 道慈によつて別三論衆が設置されたものとなる。とすれば、安澄は、この系統を正しく相続していることになるが、後述のごとく、安澄は、元康の『中論疏』やその師とする碩法師の『中論疏』を頻繁に引用することとは、右の見解を傍証することとなるであろう。しかし、安澄には、三論衆と別三論衆との識別が存していたかどうか。すでに表面的には、その区別は取除かれていたはずであるが、しかし内部においてはなお前時代の影響が残つていたとも考えられる。あるいは、三論宗の大安寺流と元興寺流の識別は、その辺に由来するのであろうか。なお、成実衆が、恐らくは、

最も早く存在しても良いと考えられる法隆寺に設定されないよう見受けられ、また大安寺にも見えないことと考へ合わせ、別三論衆の意味するところについては、問題が残されているようにも思う。三論宗の伝来や教系についての詳細は別に論ずる機会を得たい。

### 三 引用書の概要と形態

『中論疏記』は、現在完本として伝えられておらず、大正新修大藏經及び日本大藏經本共に卷一末、卷四本・末、卷六本・末が一致して欠けている。この中、卷六の末は、東大寺所蔵の古写本中に存することが近年泰本融博士によつて確認された。<sup>(28)</sup> そこで、本稿の引用書の整理に際しては、現行の大正藏本に東大寺所蔵の巻六末の部分を加えた。

なお引用書の文献名、作者、存否等の比定確認について一言するならば、安澄は、吉藏の『中觀論疏』の一節を掲げて、次に「今案」「案」の言を付して、考証し、諸文献を引用する。従つて、単に人名のみを出す場合も、それが、吉藏疏に対する注釈であるのか、他の経論等の注釈であるのか、経論の場合も、特定の経論を引用し、続いて、その注釈書を引用するから、誰の何に対する注疏であるかの推定が、ほとんど可能である。また三論宗関係以外の場合は、人名と文献名を共に示して引用することが多い。大方の場合は、安澄の

引用状況のみで判別がついた。その上で、第一には、石田博士の『奈良朝現在一切經疏目録』との照合を行ない、文献名、作者、当時の存否を確認し、そこにおいて見出せないもの、

不明のものは、『東域伝燈目録』や『諸宗章疏録』を参照し、

最後に、現在における存否を確認した。現存本については、引用文の所在を確認し、文献名と作者を確定したものである。

勿論、不明のものも数部存する。

#### a、引用の部数

初めに、安澄の引用せる仏教関係文献の部数を調べると、

中国撰述書（翻訳書も含む）が、一二六部、日本撰述の書が十八部で、合計一四四部である。この中には、中国か日本か明確に判別しかねるものもあるが、一応、引用の形態、引用文の内容上より、いざれかに分類し、部数を計上したものである。また日本撰述の中には、「有人云」「有人伝云」等として関説するものも一部として含めてある。中国撰述書の中で、『肇論』の引用は、それに含まれる五章の各々の名前を出して引用し、「肇論云」という引用の仕方は一度も出て来ない。この場合は、現在の形態に従って、一部として数えた。

右の中国撰述書を、釈経、釈律、釈論、雜部の四種に分類してみると、釈経三八部、釈律五部、釈論四十部、雜部四三部となる。次に日本撰述書は、釈経が六部、吉藏書の末註が七部、その他五部となる。

次に引用文献の内容上から、三論関係、唯識法相関係等に分類し、部数の多いものを掲げると次の如くである。

- 一、三論関係 五九部
- 二、唯識法相関係 二三部

- 三、華嚴関係 九部
- 四、成実毘曇関係 七部

- 五、律関係 六部

右の三論関係には羅什の門下たる僧肇や僧叡、曇影、又、慧影も含めた。

次に著者別に、二部以上の著書が引用されている人々を調べると次のようになる。

#### 一、三論関係者

1 吉藏	二三部	2 僧肇	四部
3 僧叡	三部	4 曙影	二部
5 慧蹟	二部	6 元康	二部（以上中国）
7 智光	五部		
8 元曉	三部		
9 慧遠（淨影）	二部		
10 道宣	三部		

11 上宮王 三部 12 信行(行信) 三部

右の内、吉藏の書として現在伝えられているものは、二十八部を数えるが、安澄が引用しないものは、『華嚴遊意』『維摩經遊意』『維摩經略疏』『金光明經疏』『觀無量壽經疏』『大品遊意』の七部である。これより判断すれば、吉藏の主要なる著書は、すべて将来され、安澄の元に揃えられてあつたことが知られる。また慧贊と表記した人物は、安澄の言う「碩法師」であるが、最後の信行と共に後に触れるであろう。

b、引用回数

次に文献毎に、引用回数を調べて見ると次の如き結果となつた。今は、十回以上関説引用する文献のみを参考に掲げてみよう。

一、中国撰述書

1 碩法師『中論疏』	二六二回
2 琳法師『中論疏』	一六五回
3 元康『中論疏』	一四二回
4 慧影『大智度論疏』	七一回
5 智藏『成實論大義記』	四七回
6 曇影『中論疏』	四〇回
7 聰法師『成實論章』	三九回
8 道基『阿毘曇章』	二九回
9 法寶『大般涅槃經疏』	二七回

二、日本撰述書

1 智光『中論疏述義』(述義)	七八五回	10 曇捷『法華字釈』	二三回
2 不明『中論疏別記』(別記)	九七回	11 法魏『雜阿毘曇心論疏』	二三回
3 元開『中論疏記』(淡海記)	五三回	12 僧肇『肇論』	二二回
4 智光『肇論述義』(述義)	二四回	13 慧皎『高僧伝』	一九回
5 智光『淨名玄論略述』(述義)	一六回	14 元康『肇論疏』	一七回
6 不明『中論疏記』(有記・有一卷記)	一六回	15 不明『中論疏』	一六回
三、吉藏の撰述書(中觀論疏を除く)		16 慧均『大乘四論玄義』	一五回
1 大般涅槃經疏	八八回	17 法朗『中論玄義』	一〇回
2 淨名玄論	五二回		
3 法華經義疏	四九回		
4 百論疏	三八回		
5 維摩經義疏	二〇回		
6 三論玄義			

7 大乗玄論 一九回

8 二諦章 一七回

9 勝鬘經寶窟 一六回

10 法華玄論 一四回

右の集計に依つて、安澄が、考証注釈を加えるに際し、如何なる文献を重視し、依拠として行つてゐるか、一目瞭然たるものがあらう。吉藏の『中論』解釈の背景、その前提となつた思想学説については、すでに指摘されているごとく、南齊智琳（四〇九—四八七）の『中論疏』や曇影（一四〇四—）の『中論疏』、僧肇（三七四—四一四）の『肇論』及び法朗（五〇七—五八一）の『中論玄義』に、その典拠を求めていることが知られ、それは逆に、吉藏が、それら先行する文献を踏まえて注釈を著わしたこととも示唆することとなろう。また、中國南北朝から、陳・隋に至るまで隆盛を究めた『成実論』の研究、その学説に関しては、吉藏の著書によつても、その中心となるのが、梁の三大法師であることは明白であるが、その中心人物たる開善寺智藏（四五八—五二二）の『成実論大義記』の引用は注目して良い。さらに吉藏の後に続く碩法師や元康（一六二—七一）の疏を頻繁に引用することは、安澄の学系及びそれらの書の日本伝来を考える上で注意される。日本撰述の文献に関しては、絶対的な依用度を示す智光の『中論疏述義』が最も注目される存在であろう。安澄は、時として、

見解を異にする場面もあるが、当時の『中論』研究乃至吉藏の『中觀論疏』の研究において、智光の「述義」が、如何に重んじられ、当時の権威とされていたかを物語る顕著な例を示すものではないかと思う。智光には、他に多くの著書があつた<sup>(30)</sup>。その主要なるものを、安澄はすべて引用する点において、当時の三論研究、あるいは三論宗にとって、智光の占める位置、果した役割の大きさを知ることが出来る。吉藏の著書の引用に関しては、『涅槃經疏』の存在が、すでに注意され研究がなされている。<sup>(31)</sup>

以上が、安澄の引用状況の大要である。『中論疏記』の性格については、先に一言したが、安澄の引用態度は、学的な立場を失うことなく、諸文献を公平に扱い正確に引用することを基本的な姿勢としていることが察知される。この点は、本書の冒頭、表題の下に「集衆異説、不敢和会」と記されていることによつて充分窺われるところである。しかし、時としては、右の原則を守つてゐるとと言えよう。経律論の引用に際しては、自己の見解を提示することも屢みられるが、全体としては、右の原則を守つてゐるとと言えよう。経律論の引用に際しては、ほとんど巻数を明示して引用する。注疏について、中国撰述に係るものは、書名・人名を明示する。その点文献存否の確認、比定は割合容易であった。但し、日本撰述に関しては、二・三の著書を除いて人名を出すことはせず、しかも略称を用いるがために、何人の著か確認不可能のものが多

い。年代の接近するもの程、その名を伏せる傾向は、中国書においても同様であろう。それに関連して、自己の師承に関する事柄についても何ら言及するところはない。その点、吉藏等の著書とは、大きな相違が見られる。

#### 四 古逸書について

右に掲げた安澄の引用書中、半数以上は、現在欠本となつてゐる、所謂古逸書である。現存本は、特に問題とすることもあるまいが、古逸書については看過出来ぬものがあろう。現存書についても、安澄の時代の学問的傾向、中国・朝鮮との関係を論じる場合、重要な要素を含んでいるのであるが、今は、特に古逸書について、判明する限りにおいて次に述べたいと思う。但し、紙数の関係で、特に説明を要するもののみ言及したい。

先に古逸書を、吉藏書、中国、日本撰述書等に分類して、その文献を掲げよう。

##### a、吉藏の撰述書

吉藏の著書は、二十二部引用する中で、現存書が十八部、古逸書が四部である。(現存書については付表参照)

- 1 大般涅槃經疏
- 2 法華經玄談
- 3 弥勒成仏經疏
- 4 大品經略疏

『大般涅槃經疏』については、註の(31)に示したごとく平井俊栄博士によつて研究が進められ、復原化が試みられてゐるが、次の『法華經玄談』については、「奈良朝現在目録」に、『法華經疏玄談』一卷という作者不明の書があるが、石田博士は、これを「東域錄」記載の『法華經玄談』一卷、隋吉公とあるものに比定されている。「諸宗錄」には、『法華經玄談』一卷、吉藏述としており、今、安澄の引用せる「玄談」と言うのは、恐らく、これを指すものであると考えた<sup>(32)</sup>。「玄談」という名称からすれば、日本の書との印象も受けたが、南都には吉藏の書として有本であつたことは確かであるし、他に「玄談」と名のつくものは記載されていないので、一応吉藏の著書として数えておく。次の『弥勒成仏經疏』は、現行本の『弥勒經遊意』一卷がそれであろうと考えられるのであるが、現行本には、その相当文が見出せないのである。さらに、長らく吉藏の著と考えられて來た現行の「遊意」は、実は、慧均の書が、誤り伝えられていた事が、最近になつて判明している。<sup>(33)</sup>「奈良目録」では、作者不明として、二種の「疏」(共に一卷)が伝えられており、「東域」には、吉藏の書と慧均の書との二つを掲げる。従つて、安澄の引用するのは、吉藏の疏であり、これは、古く散逸したものと考えられる。現行の「遊意」は吉藏のものでないことは注意を喚起したい。

『大品經略疏』というのは、「東域錄」及び「安遠錄」に記載されるものであるが、他に「廣疏十卷」を伝える。これについて「東域錄」では注記して、「大品般若略疏、廣疏、二部共古昔流傳、古師著述中、數引用之、今時未伝」とする。また「廣疏」の下に「南都本六卷疏可見、東寺」と注す。

現行本の『大品經義疏』は十巻本（欠落がある）となっているが、これが恐らく「廣疏」に相当すると考えられ、南都本は六巻であったことも知られる。現行本に関しても、冒頭に「大品玄意」の題が付されており、巻数の不同があつた事実と考え方わせると、いずれかの時点で、多少手が加えられている可能性が認められる。安澄の引用は三回見られるが、その内、二つは「疏第一」として、現行本の巻一「大品玄意」に相当する文を引くが、もう一つは『大品般若』巻二十無尽品の釈で、現行本に相当文が見出せない。そこで、恐らく、「東域錄」等で言うところの「略疏」からの引用であろうと推察したのである。

### b、中国撰述書

中国撰述書は、右の吉藏書二十二部を除いた一〇四部中、五十部が現存する。但し、現行本が完本でないために、引用文と相当するものが見出せない書が六部存する。逸書は五十四部で、次の如くである。

### 一、中国三論関係

- |   |               |
|---|---------------|
| 1 曇影『中論疏』   | 2 法瑩『中論疏』     |
| 3 智琳『中論疏』   | 4 道莊『中論文句』    |
| 5 法朗『中論玄義』  | 6 慧贊『中論疏』     |
| 7 同『中論遊意』   | 8 浄秀『中論疏』     |
| 9 元康『中論疏』   | 10 不明『中論疏』    |
| 11 不明『百論記』（以上全欠）  |               |
| 12 慧影『大智度論疏』  | 13 慧均『大乘四論玄義』 |
| 14 不明『三論略章』（以上一部欠）  |               |
| 右の中国三論関係の古逸書については、1の曇影疏、2法瑩疏、3智琳疏、4道莊の文句、5法朗の玄義の五については、すでに詳細な研究がなされており、安澄の引用書に対する作者の比定等において、それを承認するものである。 <sup>(36)</sup> この中で、曇影疏、智琳疏は「東域錄」に記され、法朗の玄義は「諸宗錄」に記載される。しかし、いずれも「奈良朝現在 |               |
| 錄」には見出せない。67の慧贊の疏と遊意については、一言を要する。第一に作者についてであるが、安澄は「碩法師疏」「碩疏」又「碩法師遊意」として引用するものであり、   |               |
| 両者同一人であることは間違いない。しかも安澄は、この人を、吉藏から受学した人としている。この点は、智光の『浄名玄論略述』巻一本において、吉藏の講説の状況を述べて、   |               |
| <small>於是大師興隆大法、仍製淨名玄等、稟法之徒百千万衆、而善知法、唯慧贊法師及一音慧藏等焉（日本大藏經第十四卷、二二〇上）</small>   |               |

と述べており、智光の言う慧贊と、安澄の引く碩法師とは同一人を指すと考えられるのである。安澄が、『中論疏記』巻一本において「吉藏師得業弟子碩、晏、邃等」（大正六五、二二上）と言うのは、何に依ったものか不明ではあるが、恐らく、智光等の伝えるところに従つたものと考えられる。そこで、智光の言う慧贊師は、中国の僧伝においては、吉藏と同門の智矩（五三五一六〇六）に受学した人と伝えられ、また吉藏との交渉も伝えられる唐京師清禪寺沙門釈慧贊<sup>(37)</sup>（五八〇—六三六）をおいて外にないものである。南都においては、彼の著書か僧伝で言う吉藏との因縁を重視して、吉藏の門下として伝承されたものと考えられる。彼の『中論疏』については、「東域錄」「諸宗錄」に記載さる。7の『中論遊意』については、従来、現行本として存在する『三論遊意義』一巻に比定されている。しかし、安澄の引用文と、現行本とを比較対照してみると、相応しないことが判明する。<sup>(38)</sup>吉藏の『三論玄義』を安澄等は『中論玄義』と称することなどから考えると、現行本と同一なるものとの推測が出てくるのであるが、実際の引用文が相違しているとなれば、少なくとも、安澄の引用する文献は、現行の「遊意」ではないと言うべきであろう。この「遊意」については、「安遠錄」も「東域錄」も共に「三論遊意一巻」とし「東域錄」では十五紙とする。この紙数から考えると、目録で言うものと現行本とは一致するよう

に思う。異同等についての結論は留保したい。

8の淨秀師の疏は、七回の引用が見られるが、現行の疏記では「淨義寺疏」とか「淨義等疏」となつており、義は秀の誤写又は誤読と思われる。これが淨秀の疏の引用であろうことは、「述義」（智光）が曇影の疏にコメントしたことを批評して、

然述義云、此師製述中論義疏、凡有四卷、流行於世者非也、彼四卷疏無作者名、疑淨秀師疏也（大正六五、六三中）

としていることによつて知られる。これに依れば智光の言う四卷疏とは、曇影のものではなく、淨秀の疏であろうと言うのであるが、それには作者名なし、という。しかし、安澄は、この四卷疏を淨秀のものと判断していたごとくである。しかし確たる根拠が見出せなかつたようにも理解される。引用に際し「淨秀等疏」として、「等」の字を付すのは、その辺の事情によるものとも言えよう。右の安澄の言及にも明らかなごとく、智光も、すでに淨秀師の疏の存在は知つていたことが予測されるが、彼の『淨名玄論略述』巻一末では、淨秀法師として、その釈を引用することによつて、確実となる。この淨秀疏については、奈良、東域、安遠等の目録には見えず、「東域錄」では別に「三論略章三卷淨秀」と記載している。これとの同異は不明である。

る。慧贊の疏と並んで、安澄が頻繁に引用することは注目される。僧伝では元康の師承は明確ではないが<sup>(40)</sup>、我国の伝承では、慧贊に三論を学んだものとし、道慈が入唐して、吉藏の孫弟子たる元康に学んだことを伝える。<sup>(41)</sup>この点は、従来の研究においても、充分可能性のあることとして認められていて<sup>(42)</sup>。安澄が道慈の正系を相承する人である点において、右の事柄との関連上、その引用についても充分考える契機が存する。慧贊及び元康の疏が伝えられていたという事実、右の師承に関する我国の伝承も、それらの著書を参照することによって成立したものであることが推察可能だからである。従つて、それら文献を有しない者としては、南都の伝承を即座に否定し去ることも出来ない。元康には多くの著書があった。<sup>(43)</sup>

目録では八部を数える。その中で、安澄は今の『中論疏』と

現存する『肇論疏』の二部を引用する。10の亡名の『中論疏』は、十六回の引用が見られるが、11の『百論記』と共に不詳である。

13の慧均の書については、筆者も言及したところがあり、多言を要すまい。ただ、この書が南都においてかなり依用されてはいるものの、さほど重要視されなかつた節がある。それは智光が、慧均や淨秀のことにつれて、「淺學之徒」と評価することに端的に表われていると思う。早くから、吉藏との見解の相違が指摘されていたものと考えられる。ただ筆者

は、本書に述べられていたと考えられる三論の師資相承に関する事柄については、法朗門下の直伝ということで、我国の伝統説の成立に有力な根拠として影響を及ぼしたのではないかと考えている。<sup>(45)</sup>この点に関しては、別に論じてみたいと思う。

14の『三論略章』は、目録では三巻とされ、作者も不明である。現行の「略章」との関係において、すでに考察が加えられている。安澄は二回のみの引用なので、不明な点が多いが、一ヶ所は、確かに現行本に相当文が存するが、もう一ヶ所の引用文は一致しない。<sup>(47)</sup>目録の三巻と現行の一巻というのも相違する。従つて本来三巻本であったものが、後に略抄されたのが、現行本であろうとの見解も出て来る。ただ、従来注意されていないのは、現行本の奥書に

三論略章造 道藏為七世父母現在父母及一切六道四生衆生（正統  
藏二、二、三、二九六左上）

と記されていることである。つまり付点の「造道藏」を如何に理解するか。これは明らかに道藏という人物が、これを造つたとの意味に受取られるのではないか。しかし、現行本の表題下には「胡嘉祥法師導義之要」とされる。とすれば、道藏が、吉藏の著書よりその要義を抄録して『三論略章』を作つたということになろうか。安澄は、吉藏の著書として引用する。しかば、安澄の用いたものには右の奥書が付され

ていなかつたのであろうか。あつたとしても、その内容上、吉藏の言を伝えるものとして引用したものとも考えられる。

後代、現行本のように簡略化される過程において付加されたものであろうか。道藏を人物として理解するならば、吉藏以後の人としては、天武十二年（六八三）、百濟より渡来したとされる道藏のみである。この人は『成実論疏』十卷又は十六卷を作つたとされ、「東域錄」は十卷として「元興五師」とし、「諸宗錄」は十六卷とし「道藏等五師」とする。<sup>(48)</sup>つまり元興寺の住僧と共に疏を作つたということであろう。従つて、この道藏は、成実の学者である。しかし年代的には、すでに吉藏の三論学をも学んでいたとしても不思議はない。しかし、先の奥書に記される道藏が、百濟の道藏であるか否か、他に証すべき資料が見当らない。もし同一人とするならば、道藏は来朝の際に持ち来つたものか、あるいは右の『成実論疏』のごとく、元興寺の人々と協力して、「略章」を作成したかのいずれかであろう。『続日本紀』によれば、養老五年（七二一）には、年八十を越えていたと言う。しかも法門の袖領、釈道の棟梁と称され、重きをなしていたことを伝える。また古文書に見える筆写は、景雲二年（七六八）であり、安澄が生れて間もなくの頃である。この時作者名が記されていないのは、吉藏の自著でないことを物語ると共に、右の事情を反映しているものかも知れない。後に安澄が、これを吉藏の言を

伝えるものとして、吉藏の釈として引用する可能性は充分考えられるであろう。

ところで、右の三論関係の書、特に『中論』の注釈書について言えることは、元康の疏を除いて、他はすべて古文書の筆写の記録には現われていないことである。つまり、これらは文献の伝来について、いつ、誰によって将来されたのであるか、の問題が生じる。境野博士は、慧蹟や元康の疏は、道慈の所伝であるとされる。<sup>(49)</sup>しかしながら、吉藏の『淨名玄論』は、道慈の帰国（七一八）以前の慶雲三年（七〇六）に筆写されており、吉藏の書及び、それ以前の注釈書は、すでに慧灌や智藏によつて将来されていたことは考えられよう。道慈の将来ということに関連して、智光が道慈から三論を受学した、という説が多少問題になるところである。智光の著書は、わずか『心經述義』と『淨名玄論略述』しか残つていないので断言は出来ないが、安澄ほどに、慧蹟や元康の影響が顕著には見られないからである。少なくとも、現存の書中、元康については何ら言及しない。もし道慈が帰国するや、元興寺に赴いて師事したとするなら、当然、道慈の将来した新たな文献にはいち早く注目したであろうと考えられるからである。従つて、慧蹟や元康の疏が道慈の将来にかかるものであるか否か、また智光が道慈に受学したという推測が妥当か否かは、さらに検討の要があると思われる。

次に経律論の古逸書は左の如くである。

## 二、経律論の注疏

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 劉虬『注法華經』                   | 2 曹捷『法華字釈』                   |
| 3 曹延『涅槃經疏』 <sup>(51)</sup>   | 4 玄範『無垢稱經疏』                  |
| 5 真諦『金剛般若經疏』 <sup>(52)</sup> | 6 道証『大般若籍目』                  |
| 7 僧馥『注勝鬘經』                   | 8 元曉『金光明經疏』                  |
| 9 勝莊『最勝王經疏』                  | 10 懇興『最勝王經疏』                 |
| 11 熙師『最勝王經疏』 <sup>(53)</sup> | 12 円測『無量義經疏』                 |
| 13 不明『文殊問經注』                 | 14 玄忬『四分律音義』                 |
| 15 智藏『成實論大義記』                | 16 聰法師『成實論章』 <sup>(54)</sup> |
| 17 嵩法師『成實論疏』 <sup>(55)</sup> | 18 宗法師『成實論疏』                 |
| 19 不明『成實論疏』 <sup>(56)</sup>  | 20 法魏『雜阿毘曇心論疏』               |
| 21 道基『阿毘曇章』 <sup>(57)</sup>  | 22 道基『攝大乘論章』                 |
| 23 真諦『攝大乘論疏』                 | 24 不明『仏性論疏』 <sup>(58)</sup>  |
| 25 玄範『弁中辯論疏』                 | 26 文備『廣百論疏』                  |
| 27 義斌『大毘婆沙抄』？                | 28 真諦『金七十論釈』？                |
| 29 不明『摩訶衍論記』（以上全欠）           |                              |
| 30 法寶『涅槃經疏』 <sup>(59)</sup>  | 31 元曉『瓔珞本業經疏』                |
| 32 文軌『因明入正理論疏』（以上一部存）        |                              |

右の経律論の注釈書に関し、最も注目されるのが、唯識法相関係の人々の著書が多く引用されている点である。我がへの唯識法相学の伝来については、特に撰論宗に関して田村圓

澄博士（前掲書）の詳細な研究がある。今は、それらの事情については立ち入らないが、『撰大乘論』を中心とする唯識学は、道昭（六二九—七〇〇）等によつて将来され、慈恩大師（六三一—六八二）によつて成立した法相宗は、玄昉（一七四六）や神叡（一七一七一）によつて、唐及び新羅から伝来される。従つて、安澄の時代は、撰論衆から法相宗へ移行し、南都においては、法相宗全盛の時代である。同時代の法相宗の代表的人物として、護命（七五〇—八三四）や善珠（七二三一七九七）、玄賓（一八一八）、行賀（七二九一八〇三）等が興福寺を中心に行はれていた。しかもその研究の中心は、玄奘門下の唯識法相宗の人々の著書を依拠としていたことは言うまでもない。安澄の引用は、このような当時の学界の状況を正に反映していると言えるであろう。右に掲げた人々では、撰論宗としては、真諦、道基があり、玄奘門下に連なる人としては玄範、勝莊、文備、懇興、円測であり、道証は円測の弟子である。これらは、唐における法相宗の興隆と共に新羅の影響と見ることも出来よう。また現存する文献としては、慈恩の諸著作や普光、法寶、文軌、靖邁及び元曉の書が引用されている。吉藏の著書を解釈考証するに際し、真諦や道基を除いては、すべて吉藏より後代の人々の、しかも他宗の人師の説を多用することは、安澄の当時において、如何に法相宗の学問が無視出来ぬ存在となつていたかを示すものと言える。

さらに、元暁の『金光明經疏』や勝莊等の『金光明最勝王經』に対する三部の疏を引用することは、我国における旧訳の『金光明經』と新訳の『金光明最勝王經』の読誦依用の状況を暗示するものと考えられる。つまり旧訳の重視から新訳の重視へと変化し、天平六年(七三四)頃には、新訳の『最勝王經』<sup>(60)</sup>が主に用いられるようになつた。<sup>(61)</sup>この傾向は、最勝(61)として定着することに具体的に示されている。しかし、注釈書の多くは、新羅の学僧によって著わされている点において、新羅学問僧の影響に依ると考えて良い。安澄は、これら中国・朝鮮・日本の学界の状況を、そのまま反映していることが知られる。

これに反し、華嚴宗も、天平八年(七三六)の道璿の来朝や、大安寺僧審詳(一七四五)を講師とする『華嚴經』の講説の開始(天平十二年)や東大寺盧舍那仏の造立等により、南都仏教の一中心を形成しているのであるが、この影響は、慧遠、法藏、元暁の三人に留まる。これが、即座に、当時の華嚴学の傾向を示すものとは言えないが、奈良時代の華嚴学の中心が、法藏と元暁の書であったこと、しかも新羅の影響に依るところであろうことは、審詳の蔵書の内容によつて知られる<sup>(63)</sup>。また東大寺の造営と共に、六宗の絵厨子が設置され、各々の必要とする經論疏を納めてあつた。<sup>(64)</sup>その中で、華嚴宗のものとしては、法藏の著が十三部三十九巻、元暁の著が十部

三十巻と最も多く、他に慧遠、智儼、慧苑、表員等の書が納めてあつたとされる<sup>(65)</sup>。安澄の引用は、このような事情を示唆しているとも見得るであろう。

なお、右には掲げなかつたのであるが、安澄は「宣律師一切經要集」を一度引用する。これは東大寺本に見られ、「言十月處於胎獄等者、案、宣律師、一切經要集、八苦緣引五王經云、佛為五王說言、人生在後常有無量衆苦切身、(中略) 諸人咸言、此是大苦」(南都佛教第三十八号、九三頁参照)

右の如く記すのであるが、この文は、現在、道世(一六六一)の撰とされる『諸經要集』二十巻の文と一致することが判明した。卷二十の「八苦緣第三」(大正五四、一八五中一下)の冒頭の文である。道世には『法苑珠林』一百巻の大著があり、『諸經要集』の撰述との前後について異説が存するごとくである。「東域錄」では、玄惲とするが、「諸宗錄」卷一では、道宣述とし「按、南山錄云、今藏題云玄惲、隋函音云道世、或云道集道訖等、皆誤也、今依卷首、祖師自序云云」(大日本佛教全書第九十五、七二下)と述べている。安澄は、道宣の著と考へていたことは確かで、道宣と道世の名前の相似及び共に西明寺僧なること等より混同したものとも思われるが、この点については、なお一考すべきであろう。

### 三、その他

1 積道安『五失三不易』

2 僧弼『丈六即真論』

3 梁武帝『発菩提心論序』 4 光泰『二諦搜玄論』<sup>(67)</sup>

5 元曉『二障章』 6 不明『大乘義林賢聖義』

7 不明『文義聚章<sup>(68)</sup>』 8 不明『五重遊意』<sup>(69)</sup>

9 僧祐『薩婆多部師資記』 10 宝唱『統法論』

11 『馬鳴菩薩伝』<sup>(70)</sup>？ 12 『伝法図贊』

13 『大唐図』 14 『嘉祥碑文』

- 日本撰述書の引用部数は十八部であるが、その中、現存するものが四部、逸書が十四部である。現存中、智光の『淨名玄論略述』は、欠落部分があること周知のことである。逸書の十四部は次のとおり。
- c、日本撰述書

1 智光『中論疏述義』 2 元開『中論疏記』

3 不明『中論疏別記』 4 同『中論疏略記』

5 同『中論疏記』（一巻記） 6 安澄「別抄」

7 信行『大般若經音義』 8 同『最勝王經音義』

9 同『涅槃經音義』 10 智光『玄音論』

11 同『法華玄論略述』 12 同『肇論述義』

13 不明『三論名教抄』？ 14 有人云、有人伝云等

右の日本撰述の古逸書については、789の信行について言及しなければならない。安澄は、「大般若、信行音義」「最勝王経、信行音義」として引用する。前者は、『大日本古文書』卷五（六五九頁）及び「諸宗錄」に三巻、信行として伝えるものがそれであろう。ところが後者は、「諸宗錄」では「最勝王経音義一巻、行信」として伝える。つまり信行というものと行信と言うものとの二種が存するということである。

そこで、両者について諸記録を調査すると、信行とするものとしては、「東域錄」に飛鳥寺（元興寺）の僧とし、『大般

4 の光泰の『二諦搜玄論』は、吉藏も引用し、『二諦章』<sup>(72)</sup>では野城寺光太とする。しかし如何なる人か不明である。智光も引用するし、「東域錄」「安遠錄」共に記載するから、南都において有本であつたことは確かである。いわゆる二諦義に関する古來の説を十四宗にまとめて記述していることが知

涅槃經音義』六卷、『大智度論音義』二卷、『瑜伽論音義』四卷、『仁王般若經略抄』三卷、『仁王般若經抄』三卷、『月藏分依義立名』一卷、の七部を伝える。その外にも『法華經音義』二卷、『法華玄贊音義』等数部の著書があつたことが知られるのである。<sup>(74)</sup>また『類聚名義抄』(図書寮本)には、「信云」「信行云」として多く引用される。安澄の引用する『涅槃經音義』は単に「音義云」として引くが、その前に『涅槃經』を引いていることから、恐らく「東域」で言う信行の書であろうと推察される。

一方、行信については、これまた諸文献に名前が記録されているが、法相宗の所属とされ、元興寺の僧である行信と、薬師寺の僧行信との二人の名が出て来る。この二人について<sup>(75)</sup>は、同一人か否かについて從来異説があつて一致しない。当面の問題に関する人は、言うまでもなく、元興寺の行信である。彼は天平九年(七三七)に御製の『法華經疏』や太子御持物の鉄鉢等を探し求めて法隆寺に施入したことや、<sup>(76)</sup>法隆寺の夢殿を建立したこと。<sup>(77)</sup>また天平十九年(七四七)の法隆寺、元興寺、大安寺の「伽藍緣起并流記資財帳」に各々大僧都として署名している。さらに写經所における筆写のために『法華玄贊』を奉請されたり等、多くの事蹟が伝えられているのである。著書として行信の名を記すのは、上に述べた『最勝王經』の音義の他に、「諸宗錄」では、『仁王經疏』三卷を載

せる。また「東域錄」では『略集諸經律論等中翻梵語』一巻が見える。

そこで、以上の諸記録より判断すると、信行と行信は住処が共に元興寺で、しかも法相宗の人であること。<sup>(79)</sup>両者の著書の性格を見ると、共に音韻の学に勝れていたことが明らかであり、「東域錄」の『仁王般若經略抄』三巻または『仁王般若經抄』三巻は、「諸宗錄」の『仁王經疏』三巻であると考えられること。さらに信行に『法華玄贊音義』があり、行信は『法華玄贊』を奉請されていること等を考え合せる時、兩人は同一人物であると推察される。そして、大日本古文書や資財帳、『七大寺年表』『僧綱補任』等には、行信の名が一致して見え、信行の名は、古文書においては、その著書に関してのみ見出せるものであること。そのことは、諸目録に頗著であつて、このような状況から行信が本来の名前で、信行は通称ではなかつたか、と推察される。<sup>(80)</sup>

そこで、安澄も当然、中央の政界あるいは仏教界で活躍したのは行信であることは充分知っていたはずであるが、その著に関して、なぜ信行とするものが多く見られるのか、という問題が起る。この疑問を解く上で想起されるのが、薬師寺僧行信の存在である。薬師寺行信は、『続日本紀』によれば、勝宝六年(七五四)十一月に、八幡宮主神大神朝臣多麻呂らと意を同じくして厭魅したため罰せられ、下野の薬師寺に流さ

れた人である。この人は、かなり社会的地位も高い人であったとされ、右の事件は、当時、大きな話題となつたであろうと考えられる。

同名の別人が居た場合、どちらかが改名もし

くは呼ぶ時に区別出来るように表現するのが一般であったと

するなら、<sup>(81)</sup>以上の安澄やその他の信行という呼称は、正に、それに相当するのではなかろうか。つまり薬師寺僧行信と区別するために、信行という呼び方をしたのではないか、といふことである。それが、同一人物の著書を列举しながら一方

は信行とし、他方行信とする例が見られる理由であろう。もし、右の推察が可能とするなら、信行という呼称は、薬師寺行信の事件（七五四年）の後でなければならない。このことを証する例として、古文書中最初に信行として著書を記載するのが、宝字二年（七五八）の『法華經音義』である。つまり薬

行信とは別人であるということになる。

## 五 おわりに

安澄の引用せる諸注釈書の概要は以上のごとくである。古逸書の比定等については、各々考察、解説を加える必要性があるが、紙数の関係で割愛せざるを得なかつた。すでに明らかなごとく、安澄の引用は、その部数、内容の豊富さから見て、奈良時代末から平安初期の文献としては、右に出るものはないであろう。特に多くの古逸書の引用は、種々の点で貴重な資料を提供している。それは、吉蔵の博引傍証の学風に相通する一面を有すると同時に、安澄の学問の背景を如実に物語るものと言えよう。安澄の『中論疏記』をめぐる問題は非常に多い。

師寺行信が流罪となつた四年後の記録である。その後神護景雲二年（七六七）には『信行師音義』<sup>(82)</sup>が筆写されている。これに対して、「奈良錄」記載の『仁王經疏』は、勝宝年中の筆写とされており、彼の事件の起る少し前か、直後であり、これには行信と記されている。つまり、この時は、まだ区別することが例となつてはいなかつたと見られよう。従つて、安澄の頃には、これが通例となり、特に著書の引用の場合には、混同を避けるために、信行の呼称を用いていたのではなかつたかと思う。この観点からすれば、元興寺の行信と薬師寺の

冒頭にても一言したごとく、今回は、中国・日本の仏教關係の注釈書に限定したのであるが、経律論及び漢籍の依用状況をも含めて、全体的な把握をし、その上に立つて、彼の学問なり、当時の仏教研究の具体的状況を理解すべきであることを論を俟たない。それは、安澄自身の見解が如何に表明されているか。その当否如何を分析することによって、吉蔵の思想學説の繼承あるいは展開等を解明して行くことが必要となる。幸い、安澄に先行する智光の著書も残されている。それとの比較も当然課題となつて来る。その外、奈良時代前後

の三論研究に関する問題点を列挙するならば、

一、三論源流系譜についての、伝統説成立の背景。これに

関連して、

二、凝然の三伝説成立の問題。

三、三論関係書の日本伝来について。

四、三論衆と別三論衆の相違、その内容は何か。

五、朝鮮半島との関係、出身者、影響について。

六、法相宗等他宗との関係交渉の具体的状況。

引用書の分析研究の過程において、直接間接に関りを持つて浮び上った問題である。その点、今回の整理は、その基礎的研究の一端となると同時に、多くの示唆を我々に与えてくれたものと言えるであろう。

(昭和五十二年七月七日稿)

### 註

- (1) 安澄の伝記は『元亨釈書』卷一(大日本佛教全書第六二卷、七九中)、『本朝高僧伝』卷五(同第六三卷、四五中)、『東國高僧伝』卷三(同第六二卷、二五〇下)、『三論祖師伝集』卷下(同第六十五卷、一六四上)『三論祖師伝』(同、一六七下)に記載される。さらに、『三国仏法伝通縁起』『内典塵露章』『東大寺真書』に闡説され、寿遠伝、智光伝、善議伝、泰演伝、実敏伝にその名が出ず。

- (2) 『日本大藏經』本は、十巻に分けてあるが、これは、吉蔵

の『中觀論疏』十巻本末に合わせたためであり、本来は、七巻の本末である。

(3) 羽溪了諦「三論解題」(国訳一切經中觀部一、五頁)に依る。後述のごとく、安澄は「如別抄」として、自著に闡説し、『三論名教抄』を引用する。これを指して言つたものか。

(4) 井上光貞「南都六宗の成立」(『日本歴史』第一五六号、昭和三十六年六月)参照。

(5) 石田茂作『写經より見たる奈良朝仏教の研究』において分析された宗別の書写の部数、傾向によつても知り得る。法相宗との関連については、次註参照。

(6) 寺崎修一「奈良朝三論宗衰因考」(『宗教学紀要』創設廿五周年記念号、昭和六年九月)及び池田源太「石淵寺勤操と平安佛教」(『南都佛教』第五号、昭和三十三年十月)等参照。

(7) 参考までに引用の多いものを上げると、『玉篇』『說文』『廣雅』『爾雅』『字林』『莊子』『老子道德經』『三蒼』『論語』『字書』等である。

(8) 前註(5)の一〇頁以下参照。

(9) 田村圓澄博士は、その著『飛鳥・白鳳佛教論』(古代史選書2、雄山閣、昭和五十年九月)において、飛鳥・白鳳佛教の展開を、百濟・高句麗僧の時代(第一期)、大唐學問僧の時代(第二期)、新羅學問僧の時代(第三期)の三期に分けられた。

(10) 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』及び『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』(大日本佛教全書第八五卷所収)参照。

四十四年二月、塙書房) の第一部第五章で論じ、異説を紹介されている。博士によれば、修多羅衆は、道慈の設置にかかり、『大般若經』六百卷を所依とする学衆であつたとされる。しかし、同じく文献に並記されている、大修多羅衆と常修多羅衆との同異については明言されていない。また別三論衆についても、前註(4)の井上博士の論文にて、清弁系の三論を別三論とされる。これに対し、田村博士は、前註(9)の著書(一五二頁)にて「元康の教系の三論を意味するとも考えられる」とされる。この考え方も、道慈との関連において言われるのであるが、吉藏の孫弟子たる元康の三論学が、吉藏の三論学と一線を画するだけの、明確な違いがあつたのか否か。つまり、既成の三論衆と一線を画して、別三論衆として設置されるだけの、内容上の差違及び根拠が存するか否かは、吟味の要があろう。道慈が、帰国して、自己の将来した元康等の三論学を、既成の学衆に同化させることなく、新たなる三論学として、別に学団を形成し、私的に創置したものとすれば理解出来なくもない。

(12) 凝然『三国仏法伝通縁起』卷中(大日本佛教全書第六二卷、一三上)にて三論宗の伝来を、慧灌僧正を第一伝とし、智藏を第二伝、道慈を第三伝とする。

(13) 境野黄洋『日本佛教史講語』(第一巻)、三四二頁以下。及び前註(4)の井上論文、前註(9)の田村書等。

(14) 築瀬一雄「法相宗相承血脉次第」(『南都佛教』第二十六号、昭和四十六年六月)参照。また華嚴宗にも付法の次第を記したものがあつたごとくである。普機『華嚴宗一乘開心論』(大正七二、一三下)参照。

(15) 『三論祖師伝集』卷下(大日本佛教全書第六五巻、一六三上一中)に「日本祖師 三論師資伝云 人王第三十代磯島金刺 宮欽明天皇治下天国押開広庭天皇之代百濟國獻仏法、(中略) 孝德天皇治天下天万豊日天王乃請元興寺僧高麗惠觀法師令講三論、其講了日、天皇即拜任以僧正、是則日本僧正第二(中略) 次入唐學生吳智藏僧正、亦此元興、(中略) 次遣唐留学道慈律師、學緣六宗三論為要、本是元興寺……」とあるを参照。また『三論祖師伝』(同書、一六七上)の序文も、右の「師資伝」に依拠して書かれたものであろう。

(16) 凝然と同時の頃に成立したと考えられる『東大寺具書』(続群書類從二十七下所收)も、右と同様の記述をしており、今も玄覚についても「師資伝」の記述と全く同じである。「師資伝」では「次桂畏八島聖皇時、降綸旨玄覺法師、遣唐請益、法師舍忠訪道、帰朝伝燈、今吾三代之祖師也」としており、『東大寺具書』では「東大寺玄覺、初受靈叡、後掛畏八島聖皇降綸旨、遣唐請益帰朝之後、於東大寺伝通當宗」とする。『東大寺具書』も、三論宗の系譜に関しては、「師資伝」を参考していると考えられる。

(17) 『三論師資伝』は、元興寺円宗(一八六九)の著であると考へてゐるが、これには、考証を必要とするので、別に検討したいと思う。

(18) 福井康順『東洋思想史研究』(昭和三十五年三月、書籍文物流通会)所収の「聖德太子の維摩經義疏についての疑」参考。この中で、太子の『維摩經義疏』は海外からの伝本ではないか、とす

る。三經義疏については、井上光貞「三經義疏成立の研究」

〔『続日本古代史論集』中巻所収、昭和四十七年〕参照。

(19) 『三論祖師伝集』においては、吉藏に受学とはしない。しかし『三論祖師伝』や凝然、『元亨釈書』等は、すべて吉藏に受学したと述べる。

(20) 『日本書紀』大化元年(六四五)八月条。なお、前註(11)の田村書、六三頁以下参照。

(21) 前述の『三論師資伝』が最初かと思われる。凝然も『維摩經義疏菴羅記』(大日本佛教全書第十三、九二中)において、太子の師僧を三論宗の人とし、また、本元興寺の九僧正も、すべて三論宗と述べている。『東大寺具書』も同じ。

(22) 寺崎修一「元興寺智光の事とも」(現代佛教第六卷六月号、昭和四年)等。

(23) 前註(6)の池田論文参照。

(24) 安澄以前または同時の人として、元興寺円興(一七六六一)、觀成(一七一二一)、新羅僧觀智(一七一六)、百濟僧觀勒(一六二四一)、道慈の弟子慶俊(一七八一)、淡海真人元開(七二二一七八五)、東大寺弁正(一七三六)、法隆寺品惠(七四四一八一八)等が上げられる。

(25) 別三論衆は、大安寺と法隆寺の外に、弘福寺(川原寺)にも設置されていたことが、延暦十三年(七九四)の「大和国弘福寺文書目録」(『平安遺文』一二号)に見える。

(26) 衆から宗への呼称の変化は、養老二年(七一八)の太政官布告に「五宗」の語があることにより、養老から天平期に、政府による宗組織の画一化が試みられたとされる。註(4)の井

上論文参照。

(27) 『東大寺具書』に「道慈律師初於本元興寺、受智藏僧正、

後大宝元年入唐謁嘉祥孫弟元康法師、精三論」とある。

(28) 東大寺写本の校註が平井俊栄博士によつてなされ、最近「安澄撰『中觀論疏記』校註―東大寺古写本卷六末―」(南都

仏教第三十八号、昭和五十二年五月)として発表された。

(29) 平井俊栄『中国般若思想史研究』(昭和五十一年三月、春秋社)の第二章第二節羅什門下の三論研究(九三頁以下)及び第三章三論教学成立史上の諸問題(一七一頁以下)参照。

(30) 智光の著書については、拙稿「智光の撰述書について」(駒沢大学仏教学部論集第七号、昭和五十一年十月)参照。

(31) 平井俊栄「吉藏著『大般涅槃經疏』逸文の研究」(南都仏教第二十七、二十九号、昭和四十六年十二月及び昭和四十七年十二月)参照。

(32) 安澄の引用文は次の如くである。

「玄談云、先依四部大經、華嚴大品涅槃大集、四部小經、維摩思益仏藏無行、方入文門」(大正六五、四五下)

(33) 拙稿「弥勒經遊意の疑問点」(駒沢大学仏教学部論集第四号、昭和四八年十二月)及び「慧均撰『弥勒上下經遊意』の出現をめぐって―付、宝生院本の翻印―」(駒沢大学仏教学部紀要第三十五号、昭和五十二年三月)等参照。

(34) 安澄の引用文は次の如くである。

「大品疏第一卷云、止觀師六年在山中、不講余經、唯講大品」(大正六五、二二上及四六中)これは、現行『大品經義疏』卷

(35) 安澄は、『大品般若』の文を引用し、続いて「疏主釈云」

として、不可尽という経文の釈を引用している。この釈文は、

必らずしも『大品疏』のものではないとも考えられるので、な

お他書の検索を要する。

(36) 平井博士前掲書及び同「中論疏記引用の中論注釈書」（印

度学仏教学研究第二十一卷第二号、昭和四十八年三月）

(37) 『続高僧伝』卷三（大正五〇、四四〇下）参照。

(38) 安澄の引用は三回見られるが、いずれも一致しない。ただ

次の文は、現行の文と相通ずるものである。安澄の引用は「碩法師遊意云、中發觀者、此由中道發生正觀也。觀發中者、由論

主觀解發頭中道也」（大正六五、五下）であるが、現行の『三論遊意義』では「所言中發觀者、由諸法不生不滅無來無去、是

故能發菩薩正觀、故理乘云、十二因縁不生不滅、非因非果、故能生觀者、猶如胡蘆能發熱病、是中發於觀義也、觀發中者、以

觀正故、能了達諸法皆無生滅、是觀發於中也」（大正四五、一

二〇中一下）である。他の二文（大正六五、八八下と一〇三下）は相当文なし。

(46) 平井博士前掲書、三九一頁以下参照。

(47) 安澄の引用は、大正六五、一五五上一中と二三一上に見られるが、後者の文は不明。

(48) 道藏の『成実論疏』は、蔵海（一一二八七）の『大乗玄

聞思記』（日本大藏經、宗典部、三論宗章疏、一二一上）に引用される。道藏の伝は、『元亨釈書』卷九（大日本佛教全書第六二卷、一二二中）、『本朝高僧伝』卷一（同書第六三卷、二八下一二九上）に記さる。

(49) 境野博士前掲書、三六七一八頁参照。

(50) 日本大藏經所収の『淨名玄論』の奥付に「慶雲參年十二月八日記」とある。

(42) 前註（18）の福井書、二五六頁以下参照。

(43) 諸目録によると『肇論疏』三卷（現存）、『肇論夾科』二卷、『中論三十六門勢疏』一卷、『十二門論疏』二卷、『百論疏』三卷、『三論玄意』一卷、『三論玄極』二卷、『三論玄記』一卷

がある。

(44) 『大乘四論玄義』については、拙稿「大乘四論玄義の構成と基本的立場」（駒沢大学仏教学部論集第二号、昭和四十六年十二月）参照。智光『淨名玄論略述』卷五本（日本大藏經第十五、一一三下）に「而淺學之徒存二見、故嘉失宗義、即慧均、

淨秀等諸旧師、乃至今代為名利故膚微似學禿居士等」と言う。

(45) これは、『三論祖師伝集』で引用する『大乘四論玄義』の一文と、智光、安澄の伝承とが相応一致することが知られるからである。

(51) 安澄の引用は、東大寺の写本中に一回見られるのみである。

る。吉藏が「涅槃經云、功德天喻生、生稱為姊故生在前云云」（大正四二、一〇二上）と述べるのに対し、「涅槃經」の聖行品の文を指示し、続いて、「言功德天喻生者、延法師云、功德天者喻生、是出相功德報主、具六識光明照六塵境界、名功德天……」（南都佛教第三十八号、八九頁参照）とするものである。この延法師とは恐らく隋延興寺の曇延（五一六—五八八）であろうと考えられ、彼の『涅槃經疏』からの引用であろう。

しかし、一度のみの引用であることと、他の引用形態と異なり、書名も、巻数も示さないこと。また法寶の『涅槃經疏』を多く引用し、その中で、しばしば曇延の釈を引くことを考慮すると、あるいは孫引とも考えられる。諸目録等も、曇延の疏が我国に伝えられたことを言わない。

(52) 真諦の疏は、南都に有本であつたこと間違いない。「奈良錄」は『金剛般若經記』とし「義天錄」「諸宗錄」では、『金剛般若經文記』と称する。安澄の引用は一回のみであるが、次のようにある。

「真諦三藏金剛般若疏云、五条在弥帝羅國、七条在半尸國、大衣与錫杖在罽賓國、尼師壇在迦毘羅國、由此仏三衣、至今在世間」（大正六五、一九九下）なお、燉煌本の『金剛般若經疏』（大正八五所収、No.二七四一）は、慈恩、智顥、興皇師等に開説し、「真諦記」を多く引用する。恐らく法相宗所属の唐代の學僧の書と考えられるが、右の安澄の引用に相当する一文が見られるので次に示しておこう。

「如來三衣、一者安多會、五條衣、是下品服、亦名行道作務衣、亦名懶身衣、真諦云、今在彌提羅國、二者齋多羅僧、七条、

是中品服、又名入衆衣、亦名說法服、今在半遮羅國、三者僧伽梨、謂九条十五条二十五条、……鉢錫杖、在罽賓國」（大正八五、一五二下）

(53) 大正藏本は熙法師（大正六五、五二上）とするが、諸目録にはその名が見えない。あるいは興法師の写誤か誤読とも考えられるが、その場合は、11の憬興の疏である。今は、一応別出しておいた。

(54) 成實論の学者で聰法師と称される人は、北魏の成實論師である道記の弟子とされる慧聰のみである。『統高僧伝』卷六の法貞（四六一一五二一）伝（大正五〇、四七四中）に付記されるのみで、生卒年及び著書の有無は不明である。

(55) 成實を学んだ人としては、『統高僧伝』卷七所載（大正五〇、四八二下—四八三上）の北齊彭城沙門慧嵩（一五六二一）

と、同卷十所載（大正五〇、五〇一中—五〇二上）の隋彭城崇聖道場釈靖嵩（五三七一六一四）の二人が上げられる。前者は、特に毘曇を得意としたごとくであり、著書があつたか否か不詳。後者は、博学で、涅槃、地論、成實、毘曇を学び、さらに撰論等を研究している。伝には、撰論疏六卷、雜心疏五卷、その他玄義を撰したという。成實の疏は記さないが、安澄の引用は、靖嵩である可能性が強い。

(56) 安澄は、単に「疏云」として引くものであるが、『成實論』の疏であることは、前後の状況、内容より判断したものである。八回の引用が見られるが、前掲のいづれかを指すものか否か不詳。

(57) 道基（一六三七）の伝は『統高僧伝』卷十四（大正五〇、

五三二中一下）に存す。伝では「雜心玄章并抄八卷」を撰すとする。「奈良錄」は五巻とし、「東域」は十巻とするが、分巻の相違であろう。安澄は巻五を引用する。次に掲げた22の『撰大乘論章』は、安澄は單に「撰論章云」として引用し、人師を示さないが、その内容は、真諦訳に依つており、諸目録では、道基の書が相応する。四巻本と十巻本の存在を伝えるが、「奈良錄」で作者不明の『撰大乘論義章』十四巻というのは、道基のものではなかろうか。このことは、凝然の『維摩經義疏卷羅記』卷七に「福成寺道基法師、是撰論宗、弘通祖師、製造撰大乘義章十四巻、陳諸法相、彼第十四立淨土義」（大日本佛教全書第十三巻、九六中）と述べることによつて証される。右の凝然の記述に従えば、淨土義等の義科を立てていることが知られるが、安澄の引用によつても、变易生死義、十地義、凡夫伏惑義、涅槃義の存在が知られる。

(58) 安澄の引用は一回のみで、世親の『仮性論』を引用し、次に「疏云」（大正六五、一二九上）として引く。「奈良錄」では、誓空、神泰、勝荘のものを伝える。そのいづれかであろう。

(59) 法寶（一七一〇一）の疏は、朝鮮刊本として巻九と巻十のみ現存する。「奈良錄」「義天錄」では二巻本を伝えており、不完全な形で伝えられていたことを証する。朝鮮本は、義天の校勘に係るものである。しかし「東域」では十五巻とし、安澄も巻十四を引用していることから、本来十五巻であったと考えられる。安澄の巻十の引用（大正六五、一一三下）は現行本（巻十、二一右）と一致する。本書の日本伝来については、大屋徳城『日本佛教史の研究』（昭和三年二月、一一六頁以下）で考

察され、法寶疏に關して、「奈良錄」に収録されなかつた多くの古文書の記録が存することを提示され、天平七年（七三五）帰朝の玄昉の将来であろうとされる。

(60) 前註（9）の田村書、九六頁参照。

(61) 『金光明最勝王經』を宮中において最初に講じたのは、道慈であったとされる。天平九年（七三七）十月である（続日本紀等）。最勝講は、それ以前に成立していた（堀一郎『上代日本佛教文化史』（上）、一四六頁以下参照）。後に興福寺の維摩会、宮中御斎会と共に薬師寺最勝会が三会として定着する。安澄の頃は、三会としてはまだ定着していないが、その講師となることは、僧界昇進の登竜門となりつつあつたと考えられる。安澄と同輩の勤操は弘仁四年（八一三）に大安寺三論宗として維摩会の講師となつてゐる（三会定一記第一）。

(62) 『金光明經』の注釈には、元曉、憬興、太賢の書があり、『最勝王經』には、勝荘、憬興、太賢が疏を作つてゐる。

(63) 堀池春峰「華嚴經講説より見た良弁と審詳」（南都佛教第三十一号）参照。

(64) 石田茂作前掲書、七〇頁以下参照。

(65) 堀池前掲論文参照。

(66) 川口義照「法苑珠林と諸經要集との関係」（駒沢大学大学院仏教学研究会年報第九号、昭和五十年三月）参照。

(67) 『發菩提心經論』の序文と考えられるが、現行本には付されておらず不明である。ただ、安澄は、この序文に關説する前に、『梁武帝捨道詔文』を引いており、「梁武帝發菩提心序文亦同」（大正六五、七上）と言う。實際見ていたものと思われる。

「捨道詔文」は、道宣の『集古今仏道論衡』卷甲（大正五二、三七〇上）に記載する。その中で、「伏見經云、發菩提心即是佛心」とか「于時帝与道俗二万人、於重雲殿重閣上、手書此文、發菩提心」等とあり、梁武帝に本書の序文が存したことは充分考えられる。

(68) 安澄は、「文義聚章第二卷仮名義中云」（大正六五、一六下一七上）として引用する。内容が成実論師の三假説を述べることより、『成実論』の注釈書ではないかと考えられるが、不明の書である。

(69) 四回の引用があるが、二回は同文の引用である。内容は、『十地經論』及び『攝大乘論』の趣旨を述べたもので、「十地論以八識為宗、不及第九識……」（大正六五、一二三四上）とか「攝大乘論者、以九識者、六識名毘婆伽識、翻為分別事纖……」（大正六五、一八六上）というものである。唯識法相関係の綱要書と見られるが、作者、具名は不詳。

(70) 現在、羅什訳の『馬鳴菩薩伝』があるが、引用文と一致しない。安澄の引用文は、「馬鳴伝云、龍樹菩薩南方之照、韋羅法師西方之槩、鳩摩羅羅陀法師北方之善、馬鳴菩薩兼三方於東方、又云、鳩摩羅陀、韋羅二法師、善業三藏、不信大乘也」

(大正六五、二四八上) と言うものである。これに似た伝説として、玄奘の『大唐西域記』卷十二（大正五一、九四二上）に「當此之時、東有馬鳴、南有提婆、西有竜猛、北有童受、號為四日照世」と言うのがある。(71) 大正六五、四八下。

(72) 吉藏『二諦章』卷下（大正四五、一一五上）。ただし野城寺は、治城寺の誤りであろう。また『淨名玄論』卷六（大正三

八、八九二上）では「光秦法師撰搜玄論、十四宗二諦、用肇公為本、故是旧宗不名新義、宜可信之」と評価している。右の光秦は泰の写誤か。諸文献中、泰と秦の混同が多い。

(73) 智光『淨名玄論略述』卷二末（日本大藏經第十四、三〇六下）及び卷五本（同第十五、八九下）参照。

(74) 『法華經音義』は、「奈良錄」では支那撰述部に入れてあるが、今の信行の書と考えられる。その外『略明法界衆生根機淺深法』一卷（大日本古文書卷二、七〇九頁記載）がある。

(75) (77) 鶴岡靜夫『古代佛教史研究』（昭和四十年六月、一六八頁以下）参照。

(76) 『寧樂遺文』上卷、三九一頁—三九三頁。

(78) 『法華玄贊』の奉請は、大日本古文書卷八、一八六頁及び一九四頁。また行信は『七大寺年表』（大日本佛教全書第八十三卷所收）によれば、法相宗元興寺の僧として、天平十年（七八）に律師となり、天平二十年（七四八）に大僧正となり、勝宝二年（七五〇）に入滅したとされる。

(79) 信行が法相宗の学僧というのは、『東域錄』で『仁王般若經抄』三卷、釈信行抄とし、注記して「題下云、多着測疏、少加余疏、此抄統師義、可尋之」としていることによつて知られる。測疏は、円測の疏である。

(80) 境野黄洋博士は、諸目録記載の著書に関しては、信行が正しいと見られている。（『日本佛教史講話』上卷六〇一頁）

(81) 鶴岡前掲書、一七二頁参照。

(82) 大日本古文書卷五、六五九頁参照。

安澄の引用せる諸注釈書の研究（伊藤）

付表 安澄の引用書一覧（仏教関係注釈書に限る）

二四	金剛般若疏	仁王經疏	金剛般若經疏	仁王般若經疏
二五	仁王經疏	大品疏等	大品經義疏（廣疏）	大品經略疏
二六	大品疏等		大品經籍目	大品經經
二七	道証般若集		注勝鬘經	
二八	勝鬘注			
二九	勝鬘窟			
三〇	曉法師金光明經疏			
三一	勝莊師			
三二	興法師			
三三	熙法師			
三四	成仏經疏			
三五	測法師疏			
三六	曉法師瓔珞經疏			
三七	宣律師注戒本			
三八	文殊問經注			
三九	玄巒師四分律音義			
三〇	太覺師四分律鈔批			
四一	玄惲師（道世）			
四二	賓律師四分律疏			
四三	曇影中論疏等			
四四	琛法師疏等			
四五	琳法師疏等			
四五	山門玄義等			
四六	莊法師中論文句			
四七	中論疏等			
四八	中論疏等			
四九	中論疏			
五〇	中論疏			
五一	中論疏			
五一	中論疏			
五二	中論疏			
五三	中論疏			
五四	中論疏			
五四	中論疏			
五五	中論疏			
五六	中論疏			
五六	中論疏			
五七	中論疏			
五八	中論疏			
五九	中論疏			
六〇	中論疏			
六一	中論疏			
六二	中論疏			
六三	中論疏			
六四	中論疏			
六五	中論疏			
六六	中論疏			
六七	中論疏			
六八	中論疏			
六九	中論疏			
七〇	中論疏			
七一	中論疏			
七二	中論疏			
七三	中論疏			
七四	中論疏			
七五	中論疏			
七六	中論疏			
七七	中論疏			
七八	中論疏			
七九	中論疏			
八〇	中論疏			
八一	中論疏			
八二	中論疏			
八三	中論疏			
八四	中論疏			
八五	中論疏			
八六	中論疏			
八七	中論疏			
八八	中論疏			
八九	中論疏			
九〇	中論疏			
九一	中論疏			
九二	中論疏			
九三	中論疏			
九四	中論疏			
九五	中論疏			
九六	中論疏			
九七	中論疏			
九八	中論疏			
九九	中論疏			
一〇〇	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一一	中論疏			
一一二	中論疏			
一一三	中論疏			
一一四	中論疏			
一一五	中論疏			
一一六	中論疏			
一一七	中論疏			
一一八	中論疏			
一一九	中論疏			
一一〇〇	中論疏			
一一〇一	中論疏			
一一〇二	中論疏			
一一〇三	中論疏			
一一〇四	中論疏			
一一〇五	中論疏			
一一〇六	中論疏			
一一〇七	中論疏			
一一〇八	中論疏			
一一〇九	中論疏			
一一〇〇〇	中論疏			
一一〇〇一	中論疏			
一一〇〇二	中論疏			
一一〇〇三	中論疏			
一一〇〇四	中論疏			
一一〇〇五	中論疏			
一一〇〇六	中論疏			
一一〇〇七	中論疏			
一一〇〇八	中論疏			
一一〇〇九	中論疏			
一一〇〇〇〇	中論疏			
一一〇〇　一	中論疏			
一一〇　　二	中論疏			
一一〇　　三	中論疏			
一一〇　　四	中論疏			
一一〇　　五	中論疏			
一一〇　　六	中論疏			
一一〇　　七	中論疏			
一一〇　　八	中論疏			
一一〇　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　一	中論疏			
一一〇　　　二	中論疏			
一一〇　　　三	中論疏			
一一〇　　　四	中論疏			
一一〇　　　五	中論疏			
一一〇　　　六	中論疏			
一一〇　　　七	中論疏			
一一〇　　　八	中論疏			
一一〇　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　二	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　三	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　四	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　五	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　六	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　七	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　八	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　九	中論疏			
一一〇	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　　一	中論疏			
一一〇　　　　　　　　　　　　　　　　　　二	中			

○二？五？二 八九六？二三二三一？五八八六二一四 ○六四  
吉道法智法疊 太定玄玄道？元円吉同？憬勝元吉僧道同同吉

下巻のみ存

四五〇	中論玄等 碩疏等
五一	碩法師遊意
五二	淨秀等疏
五三	元康師疏等
五四	有疏
五五	百論疏
五六	十二門論疏
五七	百論記
五八	慧影師疏等
五九	成實論大義記等
六〇	聰法師章等
六一	嵩法師成論疏等
六二	宗法師成實論章
六三	疏
六四	法魏師雜心疏
六五	道基師阿毘曇章
六六	真諦三藏
六七	攝論章
六八	慈恩部執論疏
六九	法寶師俱舍疏
七〇	光法師疏
七一	攝論章
七二	慈恩唯識疏
七三	法華論疏
七四	玄範師弁中辺論疏
七五	仏性論疏
七八	基法師弁中辺論疏
七八	中論玄義 中論疏
七八	中論遊意 中論義疏
七八	中論疏？ 中論疏
七八	百論疏 百論記
七八	十二門論疏 百論記
七八	大智度論疏 大智度論疏
七八	成實論大義記 成實論大義記
七八	成實論章 成實論章
七八	成實論疏 成實論疏
七八	成實論疏？ 成實論疏？
七八	雜阿毘曇心論疏 雜阿毘曇心論疏
七八	阿毘曇章 阿毘曇章
七八	攝大乘論義章 攝大乘論義章
七八	攝大乘論疏 攝大乘論疏
七八	俱舍論記 俱舍論記
七八	異部宗輪論述記 異部宗輪論述記
七八	成唯識論述記 成唯識論述記
七八	同
七八	現行三〇卷

一一一 一二一 一二一 一二一  
 三三？三五五一〇四五五？ 六？？？四？三三？六四？二一  
 玄窺？吉法普同窺道真道法？靖慧智慧？同吉？元淨同慧同

## 嵩聰

範基	藏宝光	基	基	諦	基	魏	？	？	藏影	藏	康秀	賾
○○不詳	○○○○○○○	○	○				○	○	○○	○	○	○
○○不詳	○○○○○○○	○	○				○	○	○○	○	○○	
○○不詳	○○○○○○○○○○○○	○	○				○	○	○○	○	○○	
欠存	欠存	存	存	存	存	欠	欠	欠	存	存	存	欠

右のいずれか  
諸宗錄は四卷

一部存

智光引用

七六	備法師廣百論疏	大義章	釈道安五失三不易	大乘大義章	金七十論釈？	廣百論疏	大乘起信論義記	十地經論義記	因地入正理論疏	法藏師起信疏	文軌師因明疏	七七
七八	苑法師十地經論疏	八三	大義章	五失三不易	同	同	同	同	同	同	同	八〇
七九	法藏師因明疏	八四	釈道安五失三不易	五失三不易	同	同	同	同	同	同	同	八一
八〇	文軌師因明疏	八五	丈六即真論	丈六即真論	肇論	肇論	肇論	肇論	肇論	肇論	肇論	八二
八一	婆沙記	八六	宗本義	物不遷論	同	同	同	同	同	同	同	八三
八二	摩訶衍論記	八七	慧達疏	不真空論	同	同	同	同	同	同	同	八四
八三	大義章	八八	元康師肇論疏	涅槃無名論	同	同	同	同	同	同	同	八五
八四	釈道安五失三不易	八九	二諦搜玄論	大乘玄論	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	八六
八五	丈六即真論	九〇	二諦章	大乘玄論・均正玄義等	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	九一
九一	大乘玄論・均正玄義等	九二	大乘玄論	大乘玄論	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	肇論疏	九〇
九三	三論略章	九四	曉法師二障義	三論略章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	二諦章	九五
九五	賢聖義	九六	賢聖義	文義聚章	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	九七
九七	五重遊意											

一一一三二五三？三三同同同同一？？一 一一一三五三五四〇  
？元？慧同吉光元慧同同同僧僧道羅 聖真義文法慧文

晚	均	藏	泰	康	達	肇	弼	安	什	法	諦	斌	軌	藏	遠	備
○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
欠	欠	存	存	存	存	欠	存	存	存	存	存	存	存	存	存	欠
一部欠	智光闡說	吉藏闡說	智光依用	同	同	同	智光注釈す									卷上のみ存
一卷本存	引用															九一四卷欠

集古今仏道論衡卷中

B 日本撰述書

一 四 三	一 四 二	一 四 一	一 四 〇	一 三 九	一 三 八	一 三 七	一 三 六	一 三 五	一 三 四	一 三 三	一 三 二	一 三 一	一 二 九	一 三 〇	一 三 一	一 二 八	一 三 六
有人 • 有人 伝 • 有人 解	別抄	三論 名教	玄音 論	述義 • 肇論 述義	淨名 玄述 義 • 述義	述義 • 肇論 述義	有記 • 有一 卷記	略記	別記	淡海 記	述義	述義	最勝王 經信行 音義	音義	勝鬘御 製	御製	法華御 製
不詳	不詳	三論 名教抄	玄音 論	肇論 述義	淨名 玄論 略述	法華 玄論 略述	中論 疏記	中論 疏略記	中論 疏(別) 記	中論 疏記	中論 疏述義	涅槃 經音義	最勝王 經音義	最勝王 經音義	勝鬘經 義疏	維摩經 義疏	法華義 疏
五 安	五 同	五 同	五 同	五 智	五 同	五 欠	五 欠	五 欠	五 欠	五 欠	五 欠	六 元	六 智	六 同	六 同行	六 同上	六 上宮
澄	光	開	光	信	王												
○				○○○											○○○	○○○	○○○
○○					○○										○○○	○○○	○○○
○○						○									○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○
欠	欠	欠	欠	存	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	存	存	存
右 と 同 本 か	一部 欠														同	同	智光 引用

註

- (1) 引用名の欄で「疏等」「淨名玄等」として「等」字を付したのは、他の呼称も用いられていることを示す。  
(2) 目録の略称は次の如くである。

「奈」——奈良朝現在一切経疏目録  
「東」——東域伝燈目録

「諸」——謙順の諸宗章疏録

(3) 目録記載の有無の欄で「不詳」としたのは、同名注釈書が数種記されるも、相当するものが不明であることを示す。